
私は所謂装備品です

コーギー軍曹

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

私は所謂装備品です

【Nコード】

N2034Y

【作者名】

コーギー軍曹

【あらすじ】

1人の男が全世界の運命を背負い、絶望の宇宙へと旅立つ。これは、とある男の愛と勇気と血と涙、そしてSAN値あふれるSF冒険ファンタジーである！

と、言う様な事は一切有りません。目覚めたら金属ボディーになった男と人類創造主との物語です。

ブローグ1 月は出ているか？（前書き）

これは「我々は大勢であるがゆえに」の息抜き感覚でかいています。
更新は気分次第です。
ではドーゾ。

プロローグ1 月は出ているか？

「やあ諸君、よく来てくれた。

まずはお茶でもどうだい？ 砂糖とミルクはいるかな？

え？ そんなもの入れない？

ハハハ、確かに緑茶に砂糖は無いね。

ん？ ああ、ミルクは中々イケるものだよ。今度試してみるといい。
まあもちろん、君たちの口に合う保証はないがね」

辺りを見回す。

十程の影が集まりこの話を聞いている。

「……所で、さっきから何処を見ているのかね？

私は此処、君の目の前のテーブルの上だ。

そう、その緑色の筋繊維が詰まっているかのような円形の物体だ。
中央に半球状の金属が見えるだろう？ それが私さ。

何処から声を出しているのかって？

そんな無粋なことを聞くもんじゃないさ。

そう言う物だと思ってくればいい。

さて、何から話そうか。

私の故郷の話でもしようか。それとも両親、兄妹、友人の話か。
以前話した物語の続きでも話そうか。

たまには君たちの話も聞きたいものだがね。

何時も話をしているのは私ばかりだから、たまにはいいだろう？
なに？ いや？ そうか、それは残念だ。

何時か話してくれるまで待つとしよう。

では、今日は私の生まれの話をしよう。

ああ、そこに腰かけて聞いてくれ」

「ふう」と息を吐き、話を始める。

「私は地球と言う星の、日本と言う国で生まれ育った。

私の生まれは田舎でね、周りは森ばかり緑豊かな場所だった。

周りも優しい人ばかりだった。

ただお年寄りばかりでね、同年代が2人しかいなかった。

俗に言う幼馴染と言う奴でね、よく3人で遊んだものだ。

いつのころからか、あまりしゃべらなくなってしまったがね。

今頃、何処で何をしているのやら。

まあ、其れを確かめる術はもう無いのだがね。

小中と近くの学校に通った。近くと言っても片道2キロ半はあった。

そして高校。これはもっと遠かった。

駅から電車で1時間掛けて通った。毎朝5時起きさ。

そして大学。こいつはさらに遠くてね、一人暮らしをすることになった。

生物系の学科に進んだよ。

もともとは機械科に手を出そうと思っていたんだ。

だが、高校生の多感な時期にマンガやゲームに触れすぎたせいだろ

う、生物系に進んでしまったのは。

私はガン。ムを造りたかったが同時に寄。獣も造ってみたかった。
今思えば馬鹿な考えだったが……。

こうして大学に通い研究室に入り、研究に没頭した。

研究上法に触れることも幾つかやった。無論、盗みや殺しのような事はして無いぞ。

楽しかった。

そして私が21の時、研究中に謎の爆発が起き、それに巻き込まれた。

扱っていたのは微生物だった。爆発なんぞ起こるはずがなかったのさ。

だが私は死んだ。

ここまでが私の、私が人間だったころの一生だ」

「まあ、お茶でも飲んで1息つきたまえ。

こんなところだろう。

では、今の話をしよう。

今の私は人ではない。

今の私は……強殖装甲だ。
テ

いや、正確に言えば違うな。

中央に輝く制御装置^{コントロールメタル}、これが私だ。

そう、私は強殖装甲となったのだ。

爆発に巻き込まれ死んだと思ったら、金属球の中。

まったく、人生とは何が起こるか分からんものだな……」

ズズズ……。

お茶を啜る音が狭い部屋の中かに響く。

すると1つの影が唐突にこう言った

「お主ノ生い立ちは分かった。

しかし……実験用^{モルモット}ノ生物に対して話しかけるノはやめてくれんかノ」。

見テいテ悲しくなると言うか、少し痛々しいと言うか……。

暇なノは分かるがもう少し何とかならんかノ？」

「誰のせいだと思っていやがるんですかこの蟲爺！」

これが、最近の何気ない日常の会話である。

プロローグ2 回想回

「やあ諸君、よく来てくれた。
私は強殖装甲だ。」

今日は何を話そうか。

私が如何に非モテ人生だったか、どれ程の非イケメンだったかの話をしようか。

それとも友人と呼べる者が片手の指ほどしかいなかったという事も話そうか。

仲の良い友人2人（男女）に冷やかして『お前ら実は付き合ってるんだろ？』と言ったら『何で分かったん？』って恥ずかしそうに言い返された時の、あの何とも言えない心の状態でも語ろうか……」

「自虐ネタに走るとは、寂しい奴じゃなお」

蟲面の爺さんが突っ込む。

ネタとか一体どこでその言葉知ったんだよ。

「うるせーよ。いいだろ別に。私が自虐に走ったところで爺さんは痛くも痒くもないでしょうに」

「何故か見てイテ辛いんじゃない……」

「……」

「……暇じゃなー」

「……暇だな。」

暇だし回想でもするか」

何故このような体になったのか、其れを語らねばならんだろう。

「それじゃあ、回想スタート!」

??????????

「うゝん、むにゃむにゃ。後5分……んん?」

私の目覚めた場所は、薄暗い場所だった。

「ここは何処だ?

確か菌の実験中に何かが爆発して、それから……。

ここは何処だ?

……。

……。

いやいやいや、ホントに此处何処だ。

何て言うか、無機物じゃない。壁が有機的な何かでできてる。

何かちよつと気持ち悪い」

その部屋はまるで生物の皮膚の様な見た目の壁で覆われていた。

「それにこれは、水か? 部屋全体が水に浸かっている。

いやこれは水じゃないのか? だけど一体何だこの液体は。
て言うかさつきから全く体が動かない!?

これは……ゴ。ゴムの仕業か!? ゆゑるさん!」

テ。ヲが乗り移ったようだが気にしてはいられない。
すると、ゴポゴポと音を立てて壁に穴が合った。

その穴から出てきたのは、昆虫と人間を+して2で割ったような生物だった。

「何か来た！ 何？ 虫、虫なのか？ 虫の神様なのか？
何々、虫を殺しすぎたから復讐に来たのか？ ここは地獄の3丁目か？

美人の閻魔様にまだ出会ってないし、三途の川で居眠りしてる死神にもまだ合ってないぞ！

ひよっとして寝ていたのか？ ずっと寝ていたから覚えてないのか？
誰でもいいから助けてくれ——！」

「#?%y*?¶▼§λv!

β × o o (、 ∶ ∶ & ” O。

() \$ ∷ ∷ ?

* ´ ω ∷ * ω ∷ ∷ + つ ≡ λ つ ≡ つ ∷ ∷ (o ! ? 」

「すいませんすいません！」

踏みつぶしてごめんなさい切り刻んでごめんなさいスプレー掛けて
ごめんなさい溺れさせてごめんなさい殴り殺してごめんなさい薬品
の実験に使ってごめんなさい！

もうしないから許して下さい虫神様（仮） - ！」

「 / # \ \$ & ∥ # i ?

— ´ # ´ ∥ ∥ ズ \ 3 * \ + 〒 □ ψ \ η / θ 「

するとその虫神様（仮）は私を持ち上げ（！？）何処かへ運んだ。

その後よく分からない何かの機材的なものに入れられた。

嗚呼、これで私もおしまいか(？)

すると中に青白い光が差し込み……あれ？……何だか……意識が……遠のいて……い……く……。

「起キロ」

「うゝん、むにゃむにゃ。後5分……誰だ！」

「起キ、タカ……」

「キャ——、シャベッタ——！」

「言葉ヲ話シ、テハ可笑シ、イノ力？」

「あ、いえ。そう言う訳じゃないです。唯のお約束と言う奴です」

「ソノ様子デ、八通ジテイル、ヨウダナ」

「そう言えば何で急に日本語を？　ちょっと片言だけど……」

「面白、イ、実ニ興味深イ。

ドウ、ヤラコノヨウナ事が起コツタ、原因ハ私ニアルラシイ」

「え？　何が？　何で？」

「才前ノ記、憶ヲ見セテ貰ッタ」

「どうやって？」

「お前ノ、コントロールメタル。その情報を視力セテ貰ッタ」

「コントロールメタル制御装置？ 何それガイバー？」

「ガイバー？ ガイバー規格外品ガドウカシタノカ？」

「アア、ナるホドソ言う事力」

「勝手に自己解決するのって気になるからやめてもらえませんか？」

「ああ、すまなかつたナ。」

「所で、あなたは誰なんです？ 唯の虫と言う訳ではないのでしょ
う？」

「当然ダ、アノヨウナ原始的生物、ト一緒ニサレテは困る」

「はあ」

「我々はウラヌスでアル。ソレトモお前ニハコウ言ッタ方ガイイカ？
『降臨者』トナ」

「な……なんですとー！」

「??????????」

「以上、回想終了!」

「結構適当じゃノお。

もつと色々あつたはずじゃが」

「黙らつしやい!

……そう言えばまだ聞いて無かつたな。

あんた確か私がこんなことになったのは自分のせいだと言っていたが、一体何をしていたんだ?」

「ンン? それはノ、実は次元連結システムのちよつとしタ応用実験をしテおつたノじゃが、どうやらその際に起きタ、トラブルが原因らしいノ」

「へへ……へえ!?

今何かとんでもない物をサラツと言わなかつたか!」

「ンン。トラブルか?」

「いやその前だよ、前!」

「次元連結システムのことか?」

「そうだよ、それだよ!

あんたまさか ゼオライマー 天 でも造つてんのか!
衝撃の事実。

木原マサキは、実は降臨者だったんだよ!」

ΣΩΩΩ「な、なんだってー!!」

「誰じゃこいつ等。

それに何を言つとるんじゃお主は。

そもそも次元連結システムとは「長くなりそうだからいいや」……
そうか」

こんな感じで本日は終了。

ΩΩΩ「お疲れ様です」

「誰だお前ら？」

ブローグ3 主人公の能力設定と小話（前書き）

ギャグの道をまっしぐら。

一度でいいから強殖装甲着てみたい……。

それではドーゾ。

プロローグ3 主人公の能力設定と小話

「やあ諸君、よく来てくれた。
私は強殖装甲^{ユニット}だ。

今日は何を話そうか。

何？ 私の能力について話せと？

ふふふ、よからう。

……。

……。

……。

面倒くさいから最近流行りのF a t e風にまとめたみた」

【CLASS】ユニット

【マスター】????

【真名】御茶ノ水 賢^{けん}

【性別】元^も

【身長・体重】30?・1\2kg

【属性】中立・善?

【筋力】?

【魔力】?

【耐久】?

【幸運】?

【敏捷】?

【宝具】?

殖装する生物の能力によって変化するが、ユニット時では粗^ほ0である。

【保有スキル】

殖装

捕食の事。

捕食した知性体と有機的に結合し、その生体機能を強化・増幅する。

過剰防衛システム

殖装時のみ発動可能。

殖装者の意識が失われてから一定時間経過しても回復しなかった場合、殖装者の生命を維持するため立ち塞がる者は敵味方の区別なく撃破する。

「ま、こんなところか。言い忘れていたが、私の生前の名前は御茶ノ水賢と言うのだ。

それでどうかね？ この能力を見て。

何？ 全然大したことない？

仕方ないだろう。元々強殖装甲は装備品の様なものなのだ。

装着する者がいなければ真価は発揮できんよ。

む？ 何だねその目は。まるで口ばかりで全然使えない奴でも見るかの様じゃないか。

私は剣と楯の付いた鎧の様なものだよ。鎧は独りでに動くことはない。

無論私は普通の鎧とは違うから、単体で動き回ることも不可能ではない。

ただその場合は誰かのDNAが必要となる。

君、DNAくれないか？ 腕や足でかまわんぞ？

嫌か？　そうか、それでは仕方ないな。

所で、最近の少子高齢化問題についてなのだが「すまんが、ちょっと聞きタイことがあるンじゃが？」……なんだよ。人がイイ気分で独り言を言っている時に」

「悲しい奴じゃノ……」

「それで？　何か用があるんじゃないのか？」

「ああ、そうじゃそうじゃ。

ギガンティック
こノ巨人殖装と言う奴に付いて何じゃが」

「ギガンティック？　それがどうかしたのか？
大体あんたは私の記憶を見たんだろ？

それ以上は何も知りませんよ」

「あれは記憶を少々覗イタ程度と言う意味じゃ。
全てノ記憶を見るなどと言う事は、余程ノ暇人でなければやらンわ
イ。

それよりギガンティックじゃ。

ガイバーナレゲイションメタルの意志に反応し、航行制御球が蓄積されタ我々のノウハ
ウを基に宇宙船フネノ組織と強殖細胞を融合させ誕生させタ武装形態な
のじゃろ？。

所謂戦闘型ガイバーと言う物じゃな。

ナレゲイションメタル
航行制御球がその形状まで変化させたと言う事は、今まで起こッタ
例がなイ。

人ノ意思とは素晴らしイ。流石は兵器として生み出されタだけノ事
はある。

より強くなろうとする意志は計りしれン物があるノ」

「それで何が言いたいんです？」

「お主も同じような事出来ンか？」

「はぁ？」

「お主が強い意志を持たぬ、根性無しノヘタレであると言う事は分かッテおる。

じゃが、何事も挑戦だとは思わンか？」

「嫌ですよ、メンドクサイ！

爺さんがやればいいでしょう。

えらく感情豊かだし、航行制御球だナビゲーションメタルって認めてくれますよ」

「何を言ッテおる。

どんなことも試しテみねば始まらんじやろつ。

来タまえ！ 早速実験じゃ！」

「ちよつ、やめ……離せ、離せ、H A・N A・S E！

やめろシヨッカー！ 俺をどうするつもりだ！

な、何だその妙な装置は。またあの光が！ や、やめろ———！
」！

アッ———！

プロローグ4 まとめた話

「やあ諸君、よく来てくれた。
私は強殖装甲^{ユニット}だ。

今日は何を話そうか。

……。

何？ 現状が今一よく分からない？

そうだな。確かに、説明不足ではあったな。

先ず、ここが何処かを説明しよう。

ここは宇宙を漂う宇宙船^{フネ}の中だ。

……いきなり何をと思ったかい？

この宇宙船は降臨者の遺跡宇宙船と同じものだ。

いや、ある程度は同じと言うべきか。

彼は、この宇宙船に乗るたった一人のウラヌスだ。

そしてこの宇宙船は彼の実験施設でもある。

彼はウラヌスの中でも変わり者と言われているらしい。

その理由は彼曰く、未だ未練がましく強殖装甲^{ユニット}にしがみ付いているかららしい。

彼らウラヌスにとって強殖装甲^{ユニット}は既に完成したものであり、これ以上手を加える必要の無い物であつたらしい。

しかし、爺さんは強殖装甲^{ユニット}の研究・開発を未だに続けていた。

理由を聞いてみたが、「結果に満足してイナイからに決まっテおろ
う」と言われたよ。

私が憑依^{入っている}しているこの強殖装甲^{ユニット}もどうやら彼の開発したものらしい。

彼がどのような結果を求めて研究を続けているのかは分からない。
だが、その為に未だ様々な強殖装甲^{ユニット}を作り出している」

「……壁に向かった話しかけるノ、イイ加減止めてもらえんか？
かなり不気味なンじゃよ、其れ。
何か悩みでもあるノか？
よければ相談にくらい乗るぞ？」

「ええい、煩いわ！
特に悩みなんか無ーよ！ 心配してくれて有難うございます！」

「そうかそうか」

「……」

「……」

「そう言えば、どう言つ目的があつてこの強殖装甲を造つたんだ？」
私

「ああ、それか？ それはノ、現段階で存在するありとあらゆる技術を、可能な限り盛り込んだ物なノじゃ。

所謂『ばくのかんがえたさいきょうのユニット』と言つ奴じゃノ」

「へー。具体的に言つと？」

「一つ例を挙げるならば、殖装者単体による空間転移があるノ」

「空間転移？」

「お主らノ言うワープや瞬間移動と言ったモノじゃ。

空間転移システムはその大きさ故に宇宙船等^{フネ}ノ大規模施設でしか使用できなかったノじゃ。

其れをデきる限り小型化し、制御装置^{コントロールメタル}に組み込んだノじゃ！」

「ほー、そいつは凄いいじゃないか！

なるほど、私にもサイヤ人^{悟空}の動きができるようになるのか。

瞬間移動かめはめ波ならぬ空間転移胸部粒子砲^{メガスマッシャー}が撃てるわけか。胸が熱くなるな」

「（お前さんに胸は無イぞ？）

しかし、幾つか問題があつてノ……」

「何です？」

「エネルギーを余りにも消費しすぎるノじゃ。

恐らく一度転移すれば、距離に関わらずエネルギー不足でしばらくは戦闘などできンだろう。

胸部粒子砲^{メガスマッシャー}なぞでノ外じゃ。

其れと、転移には非常に正確なそして膨大な演算が必要となる。

下手に転移すれば地中や壁に埋まつたり、宇宙に飛び出したり、そのまま何処か別ノ次元に放り出される可能性もあるノじゃ。

しかし、制御装置^{コントロールメタル}では容量の問題でその膨大な演算が不可能でノ。航行制御球並ノ容量があれば可能なンじゃが、前回ノ実験ではうんともすんとも言わなかつタからノ」

「前回の実験？ ああ、あの巨人殖装^{ギガンテック}を造ろうとしたあの実験か…

……。

酷い目にあつた割に何も得る物がなかった、あの実験ですかあ？
私の中の大切なものが数多く失われてしまった、あの実験の事ですかあ？

ケキヤキヤキヤキヤキヤキヤ」

「何か壊れテキタノ。不気味じゃからそノ笑い方止めてくれンか？
そノ事については謝るわイ。すまんかつタノ」

「まるで謝罪の気持ちがいりませんね。焼き土下座でもして下さいよ。」

本当にすまないという気持ちで胸がいっぱいなら、どこであれ土下座ができる。たとえそれが肉焦がし骨焼く鉄板の上でも！」

ざわ…ざわ…。

ざわ…ざわ…。

「そう言えば、そろそろ実験ノ結果が出るころじゃ。ワシは忙しいから話はまた後でノ」

「適当な事言つて逃げやがったあの野郎」

〇〇〇「ざわ…ざわ…」

「うるせーよ！ さっきから言ってたのお前らか！
てか誰だよお前ら！」

Ω「圧倒的……！ 感謝……！」

「もういい、帰れ！」

これも、最近の何気ない日常の会話である。

プロローグ4 まとめた話（後書き）

まだまだ続くよプロローグ。

最近レギオンより強殖装甲の妄想が止まりません。

このままでは息抜きどころか、こっちが本編に……！

話は変わりますがヨーグルトソースって本当に紛らわしいですよね。
よくヨグソースと読み間違えてしまいます。

。。。のヨグソース掛けとか、命でも懸けてるのかと思いますよ。
主に作る人の。

プロローグ5 御茶ノ水大地に立つ

「やあ諸君ジャガ ショブン、よく来てくれたジヨブビデブシダ。
私は強殖装甲だ。」

今日は何を話そうか。

……。

……。

なあ爺さんよ、そろそろ私を歩けるようにしてくれてもいいのではないか？
具体的に言つと、もうあんたでいいから殖装させてくれ」

「うん、それ無理」

「何故ですバゼゼグ？」

「強殖装甲ノ重ね着はできンノじゃ」

「なら、今殖装している其れを外せばいいじゃないですか」

「それも無理じゃ。今この宇宙船にはリムーバーを置いて無インジ
やよ」

「リムーバーって、ユニット・リムーバー？」

「左様」

ユニット・リムーバーとは、強殖装甲を“初期化”する装置の事

である。

このユニット・リムーバーから照射される特殊なパルスにより、
コントロールメタル制御装置に記録された殖装者のデータを完全に消去することができる。

そうすることにより強殖装甲を起動以前の？ユニット”状態に戻すのである。

殖装者にとって命綱とも言える強殖装甲を解除することができる
リムーバー其れは、使用者によつては非常に危険なものとなりうる。

そのため、リムーバーは厳重に管理、保管されているのだ。
なのだが……。

「何で無いんだよ。どの宇宙船にも必ず一つは常備されてるって以前言つてただろうが」

「実はノ、実験ノ材料に使つてしもうたンじゃ」

「何でだよ！ そんな大事なもの使つか普通！ 一体何の実験に使つたんだよ！」

「お主」

「はあ？」

「じゃから、お主に使つたンじゃよ」

「ど、どう言つことなの……」

「言つたじやろ、できうるすべてを詰め込んだと。」

コントロールメタルお主ノ制御装置にはリムーバーも入つておるノじゃ。

これによりリムーバーを用伊ずに、相手は言わずもがな己ノデータ

すら消去が可能になったノじゃ」

「それにどう言った利点が？」

「其れ位お主で考えンか」

「さっぱりだぜ」

「はあ、まったく。」

今ノお主ならば殖装者を自由に選ぶ事が出来ると言つことじゃぞ」

「何で俺今呆れられたの？ まあいいや。

つまり殖装者が気に入らなければ強制的に解除が可能ってことか」

「まあ、そう言う事も出来るノ」

「ん？ 相手にもできるって言つたよな。

じゃあ、爺さんの解除できんだろ？」

「殖装状態でないと使えンぞ」

「マジで使えねーなおい！

あー畜生！ またしばらくは壁に向かって話続ける日々かよ」

「（其れは正直やめてほしィ。）

ウオッホン、そんなお主に朗報じゃ。

これを見たまえ！」

それは遠目に見れば人の形をしていた。

だが、本来頭があるべき場所には何もなく、首元には六角形の何かをはめ込めそうな窪みがある。

腕は長く膝付近まで伸びており、その手は、小指に当たる物は親指の様な形で付いていた。

足は人のそれと大差ないが、踵は無くもう一つ足がくつついていくかの様に見える。

そして皮膚は、幾つもの触手が寄り集まってできたかのような模様を描いていた。

「何ぞこれ」

「元々実験ノ補助器具として作ったンじゃが、失敗して長い間眠ってイタモノじゃ。」

それに少々手を加えてノ、ユニットでも操れる様に改造したンじゃよ」

「め、名状しがたすぎだろ、これ……」

「そうか、気に入ったか」

「だれもそんな事言ってないですよ!？」

「言うつかこいつ旧支配者だろ! 絶対旧支配者だろ! もしくはジヤミラ!」

何か皮膚がぬらぬらしてる。」

「そんな擬音初めて聞いたノ。」

「それでは早速、お主をはめ込んで……、どうじゃ?」

「キイイイイイインと音を立てて制御装置が輝く。」

ねちゃっ、と音を立てて片腕が持ち上がる。

「こ、こいつ……動くぞ……」

「どうやら成功ノ様じゃな」

「いあ！ いあ！ いあ！」

「大丈夫か？」

「うわっ、この肘関節反対方向にも曲がる！ キモイ！ って膝もか！..」

「柔軟じゃからノ」

「背中に難なく手が届く、キモイ！

それにこの手、OFオレヒタルフレムっぽい。もしくはガフラン。

夜中に出会ったら気絶する自信がある！」

「そんな自信はいらんわイ。

で、どうじゃ？ 違和感は無イかノ？」

「むしろ違和感しかない」

「じゃ、大丈夫じゃの」

「一バビゾ ギデデ ギスンデグ《何を言っているんです》。

一ギギパベ ワベバギデギヨグガ《いいわけ無いでしょうが》」

「今日はよくグロンギ語使っとるが何故じゃ？」

「ギ^いジャ、バン^{何となく}デバブ」

「まあいいわい。

これからは助手として手伝っテもらうからノ。
それまでは其の体を堪能せい」

「りょーかい」

ブローグ5 御茶ノ水大地に立つ（後書き）

主人公に体ができました。

これで自由に動き回れるよ！ やったね御茶ノ水君！

最初は今のウーヌス付けたギョオーみたいに蜘蛛型とかにしようと思ってたんだけど、気が付いたらジャミラになっていた。
何を言っているのか（ry

ブローグ6 知り合いの友人に会いに行く時ってどんな顔して会えばいいか

「ジャガ ショブン、ジョブビデブシダ（やあ諸君、よく来てくれた）。

パダギパ ユニット ザ（私は強殖装甲^{ユニット}だ）。

キョグバ バビゾ ザバゴグバ（今日は何を話そうか）。

ガギビン グロンギビ ザラデデビダボドゼロバダソ「喋つたらんで、しっかり手伝っテクレ。ほれ、次はこいつノ計測じゃ」グバ（最近グロンギ語にハマって来た事でも語ろうか）……」

また独り言キャンセルされてしまった。

この爺さん絶対狙ってやってるだろ、そうなんだろう？

これは私にとって大切な一種の始まりの挨拶みたいなものなんだよ！ と言つてやりたいが、私は空気の読める大人なので敢えて口には出させよ。

「ババダダジヨ（分かったよ）。

ドボソゼ ジギガン、バンゼ ツバデデ ジベベンギデ スンザ
フラスコ（所で爺さん、何でフラスコ使つて実験してるんだ）？

ゴンバロン ツバゲジツジヨグ バギザソグビ（そんなもん使う必要無いだろうに）」

そう、この爺さん事もあるうに地球で使うような実験用具で実験しているのだ。

こんなもの爺さんに見してみれば子供の玩具同然だろうに。

「ンン？」

イヤノ、お主ノ記憶を覗イタ時にこれを見つけテノ。
こう言つタ小道具を使うノは意外と中々楽しいモンじゃて」

「……ウラヌスン ブゲビバパデスバ、ジギガン（ウラヌスのく
せに変わつてゐるな、爺さん）」

「まあ、よく言われるワイ。（それより訳が面倒くさいからリント
ノ言葉で話してくれンか？）

ああ、そうじゃ言い忘れテおつた。
今日友人を訪ねるンじゃが、お主も来るかノ？」

「友人？ 他のウラヌスか？」

「イヤ、違う。ウラヌスには参加してイない別種族じゃ。
じゃが、ワシと個人的に仲の良い種族じゃから、心配はイランぞ」

「ふん。他の宇宙人か……」

そう言えば結構馴染んでいて忘れていたが、宇宙人と生活してるん
だよな。

何気にスルーしてたけど、これが人類と異種族との第一接近遭遇な
わけか。
ファーストコンタクト

……なんだろう、心の中の何かが音を立てて崩れて行くよ」

ちなみに私はあの「名状しがたきアーマー」を装着して作業して
いるため正確な意味で人類ではない。だから、もしかしてひょつと
したらノーカンかもしれない可能性がある。

「そもそも強殖装甲^{コンプレックス}ノ時点で人類ではないンじゃが？」

「シャーラップ！」

「そう言や今日誰かに会つとか言つてた」けど具体的には何時よ？」

「地球時間で後10時間ほどしたらじゃノ」

「割とすぐだな。宇宙に居るって実感が湧かない」

「紐付けて外に出れば実感くらい湧くじやろ？」

「それ何て処刑方法？」

「お主は強殖装甲^{コンプレックス}じゃから死にはセンじやろって」

「死ななくてもきついわ！」

「まあ、それなら付いて行くよ。何か楽しそうだ」

「ふむふむ。なら、後10時間じゃからそれまでは静かにしておい
てくれ」

「りよーかい」

（1時間後）

「この船って女性成分が足りないと思うんだけど？」

「もう我慢できなくなつたか。」

お主はたった10時間も静かにしテおれンノか？ 大体そんな成分は知らン」

「今の私は強殖生物。性欲何ぞ殆ど消えている「殆ど？」お黙り。しかし、この電子化された心の奥底で本能が叫ぶのだよ……。
“花が欲しい！”と……。正確には虹画像が欲しいところだ」

「現実ノ雌に性欲を向けンとは……。
人類はそう遠くない内に滅ぶノではないか？」

「仕方がないさ。現実問題として……。
……喋りかけただけで痴漢扱いとかふざけんな！ 誰が好き好んでテメー何かに話しかけるかよ！ 財布落としていたから仕方なく、親切心で渡してやろうとしただけだと言うのにつ！ いっぺん鏡を見てみる！ 50時間位「あなたはだあれ？」と呟きながら見続ける！ 多分そのうち精神崩壊するから、いやむしろ！ 精神崩壊してしまえ！ カミィユと同じ道をたどるがいい！ そんなんだから多くの男が2次元へと逃亡するんだよ！ 何が男女平等参画社会だ！ 既に女尊男卑四角社会じゃないか！
ぜ。ライマー！ 塵一つ残さず消滅させてしまえ——！！」

さあ爺さん、この私の心からの叫びに、一体何と言って返す！？

「(@_@) z z z z」スピー

寝とる——！！

「ひ、人が渾身の大演説をしている時に寝るな——!!」

「ン、ンン？ 終わったかノ？」

「ええ終わりましたが？」（ハ・・・ハ#）ピキピキ

「なら言いたイ事は言っタじゃろ。しばらく大人しくしテおれ」

「レノンに腕押しとはこの事か……？」

「其れを言っなら暖簾^{のれん}じゃろ？」

何でことわざまで知ってんだよ。

何故かな、最近まるで自分が馬鹿キャラのように思えてきたよ。
決して馬鹿ではない筈なのに……。

まあ、相手は宇宙をまたにかける天才種族。対して此方はその天才種族に作られた戦闘種族。

この世界では人類って某野菜人ポジだったんですね。ウラヌスから見れば人類皆脳筋か……。悲しいな。

（9時間後）

ここはとある惑星。

この星にすむと言う、爺さんの友人に会いに来たわけだが……。

「久しいノ、友よ」

「此方もだ、我が盟友よ。」

お前さんが誰かを連れてくるのは初めてではないか？」

「これはワシノ助手じゃ」

「そうだったのか。珍しい事もあるものだ、ケラケラケラケラ」

今私の目の前で笑いながら爺さんと話している生物がいる。

2頭身で、人間に似た骨格を持ち、腹部と頭部に何かしらのマークがあり、歩くと「ピコピコ」という音がする蛙の様な生物。

突っ込まねーぞ。

絶対に突っ込まねーからな！

爺さんがチラチラとこつちを面白そうに見ているが、絶対に反応せんぞ。

いいか、絶対にだ！

「助手よ、ワシはまだ話す事があるノでな。」

星に降りるノは初めデじゃろ？　じつくり見テ回つてくるとイイ」

強殖装甲って意外と表情出るんだぜ？

つまり何が言いたいかって言うとな……面白い玩具実験動物見つけた時みたいな顔してんじゃねえよ！

所変わって太陽の下。

爺さんに言われた通り辺りをうろついてみた訳だが……。
何か地球にいる気分だ。

オーイハヤクシロヨー

オイソツチイツチャイケナイツテニーチャンガイツテタゾ
マツテヨケロクン
ゼロロハトロイナー

元気にはしゃぐ餓鬼どもの声が聞こえるな。

……。

誰か私の代わりに突っ込んでくれ。

ん？ あの餓鬼ども何故あんな所を歩いているんだ？
おいおい、そんな細い足場に登ったら落ちるぞ。

あつ！ 落ちた。言わんこつちやない。

しかもこつちに落ちてきやがった。
空氣的にキヤツチするしか無いな。

オーライ、オーライ。

ボスッ

と音がして、見事両手の中にシュート。

超エキサイト……じゃなかった、全く危ないな。

あー、何か勢いでキヤツチしたけど、無性にリリースしたい。超
したい。

投げ返していいかな……。

怪我はしてないようだな。

ん？ こいつ……青くて十字の模様が腹と頭についてる……。
え！？

つづく

続くの！？

ブローグ7 知り合いの友人に会いに行く時ってどんな顔して会えばいいか

取りあえず、ぼけーつとしていたこいつを地面に下ろす。

「おい。ゼロロー、大丈夫かー！」

「ゼロローー！」

「うん、大丈夫だよ」

上から餓鬼どもが降りてくる。

「……」

ハーツと拳に息をかける（本当は息は出無いが）。そして。

「こんの、バカたれがー！」

拳を頭に振り下ろす。

ガンッ！ ギンッ！

随分といい音がした。

「いってー」「いたっ」「うー」

3人（匹？）とも頭を押さえてうめき声をあげる。

「な、なにすんだよオジサン！」

緑のガキが文句を言ってきた。誰がオジサンだ！

「誰がオジサンだ！ 私はまだオニサンだ！
大体何であんなところに上った、危ないだろうが！
今は私が下にいたからよかったものの、もしいなかったらこいつが
大怪我していただろうが！」

「ご、ごめんなさい」

「次はなるべく低い所で遊びなさい。どうしても高い所へ登りたい
なら、大人を一人呼んで見てもらいなさい。
いいな」

「は、はい」

「それとその青い坊主、怪我はないか？」

「うん、ないよ」

「ならよし。じゃあ、次はなるべく危なくない遊びをしるよ」

よし、これだけ言っておけばいいだろう。そうじゃあ、爺さんのと
ころへ「あーっ！」今度はなんだ！

「ユニットだー！」

青いのが此方を指さして叫ぶ。なんだ、ユニット有名なのか？
あと人を指さすんじゃないやありません。

「ホントだ、ユニットだ。じゃあオジサンはウラヌスなのか？」

赤いのも知ってるのか。やっぱり結構有名なのか。

「ウラヌスって何だ？」

緑は知らんらしい。何でか知らんが、こいつは将来ダメな大人になりそうだ。

「プライドがムダにたかいくせに、たいしてつよくない『ダメしゅぞく』って兄ちゃんが言ってたぞ」

「」

「それとムダにあたまはいいけど、おうつがきかないともいってたぞ」

それでいいのかウラヌス。

「一応言っておくが、私はウラヌスじゃないぞ」

「えっ、そうなのか？ でも、ユニットもってるのはウラヌスだって兄ちゃんが言ってたぞ」

「確かに私はユニットだしウラヌスと一緒にいるが、ウラヌスではなく地球人だ。……元な」

爺さん

「ちきゅう？」

「きいたことないぞ、そんなホシ」

「ああ、まだ知らんだろうなお前らは。そのうち聞くこともあるだろう」

「そうなのか？」

「ほれっ、ガキはもう帰る時間だぞ。そうら、帰った帰った」

「わかったよ。バイバイおじさん」

「バイバイ」

「ああ、帰れ帰れ」

「あ、あの……！」

ん？ 青いガキが残ってる。なんだ？

「何だ？」

「これ、たすけてくれたおれいにあげる」

「Game & amp; watch」だった。

……どう考えても、時系列がおかしい。どう言うことだ？
まだ地球人産まれてねーぞ。何で「Game & amp; watch」なんだよ！

しかも画面の中を動いてるのは、我らがアイドルMr.ゲーム&

a m p・ウォッチじゃないか。

「ああ、ありがとう。大事に使っよ」

「ゼロローはやくこいよ!」

「うん! じゃあまたねユニットのおにいさん!」

青いガキは元気に走っていった。

「私も戻るか……」

??????????

「おい爺さん、何時まで話し込んでんだ。
そのうち死ぬぞ」

「ワシノ寿命はまだまだ先じゃ。丁度今終わっタところじゃ。
さて、船へ戻ろうかノ。」

ンン? ホッホッホッ。

「どうやら歩き回っテよかつタようじゃな」

私が手に持つ物を見て、面白そうに笑う爺さん。
何故か殴りたい。

「いや、最悪だったよ」

「そうかそうか」

笑うんじゃないねえ。

??????????

「“中央”審議会からノ呼び出しか。ワシを呼び出すとは、相当焦つておるようじゃな。」

まったく、面倒な事になりそうじゃわい……」

ブローグ7 知り合いの友人に会いに行く時ってどんな顔して会えばいいか

おまけ

ピッピッピッピッ ピポッ
ピッピッピッピッ ピポッ

.....。

電池切れた.....。新しい電池は.....？

「無イノ」

さいですか.....。

次回新章「地球^{テラ}偏」突入（笑）

地球偏1 人類創造計画

「やあ諸君、よく来てくれた。
私は強殖装甲^{ユニット}だ。」

今日は何を話そう「それ毎回やらンとイカンノか？」か……。

とうとうここまで浸食を開始したか。

よっぽど私の台詞を言うのを阻止したいとみえる……。

フッ、しかしその程度ではこの私を止める事は出来ぬうー!!」

「何を言つとるンじゃお主は。」

それよりこれから地球^{ガイア}へ向かうぞ」

「ガイア？ 何でまた突然？」

「？中央”委員会から命令されてノウ。仕方なくじゃ」

「中央つて……。まあ分かりました。今度は何時間ぐらいで着くん
です？」

「120時間じゃ」

「はい？」

「120時間じゃ」

「……今度は長いですね」

「ここは銀河ノ外れじゃからノ。それなりに時間が掛かるンじゃ」

「分かりました、大人しくしときましょう。

今のうちにグロンギ語の練習でもしときましょう」

「騒がンノなら何でもええわイ」

??????????

「みんな――、地球はいいところだぞ――！ 早く帰ってこーい！」

「何故月に向かっテ吠えとるンじゃ？」

「いや、何故かやらないといけない気がする。

それにしても、人工的な明かりが全く見えない。これが1万年前の地球か……。

なんだか感慨深いものがあるなあ」

「ほれ、こっちじゃ。はよう来イ」

「はいよ」

??????????

今私は、爺さんと一緒に十数名のウラヌスに囲まれている。

爺さんと同じような形をした者の他に、人っぽい骨格をした者や尻尾のある所謂直立した蜥蜴の様な形の奴、円錐型みたいな奴までいる。ウラヌスが多数の異星種族からなる混成集団とは聞いていたが、まさかこれほど多様とは……。

ちなみに私の様な「名状しがたきアーマー」スタイルのウラヌスはいなかったと言っておこう。

<来たか。何故呼ばれたか、理解しているだろうな？>

<無論じゃ>

<銀河の隅で死に逝く定めであつた貴様を、我々は使つてやろうと言つのだ。有り難く思うがいい>

さつきから偉そうな口調で話す人型&爬虫類型。

一応訂正すると、先程から私たちは音による会話を行っていない。今行っているのは念話だ。

まあ、所謂テレパシーみたいなもので、言語どころか会話すらできない種族でも意思を伝え合う事ができる（らしい。これは爺さんから聞いたただだから真偽の程は知らん！）。

<お前達に恩を感じる必要はないのお>

<貴様！ 自分の立場を理解していないのか！>

<態々お前等がワシを呼びだしたんじゃ。大体の理由は予想がついとるわい。

大方、思つように計画が進まんと言つたところじゃろう？>

<くっ……！

理解しているのならば早急に完成させろ！ いいな！>

<仕方がないの。頼まれたからにはやってやるわい>

すると、爺さんと同じ種族であろうウラヌスの一人が口を開いた。

<ジゲルよ……お前の名誉を回復する、いい機会になるかも知れんのだぞ……。

余り、ふざけぬ方が身のためだ……>

<ふざけてはおらんよ……。元々こんな性格じゃ>

<……。

隣のそれは何だ……？ お前が誰かと共に居るなど珍しいな……>

<ワシの助手じゃ。お主が気にする事ではない。

さあ助手よ、行くぞ>

「そうか……。大事な物は……失くさぬよう、精々気をつけるがい……」

去り際にそんな事が聞こえたのはきつと気のせいだと思いたい。

??????????

「それで爺さん、何をするんだ？」

「まずは奴等ノ研究データを見ることから始めようかノ。
ナビゲーションメタル
こノ航行制御球からデータを引き出すノじゃ」

そう言つと爺さんは二つある航行制御球ナビゲーションメタルの間に立ち、制御装置コントロールメタルを展開させる。
コントロールメタル
制御装置が輝いているので、今データを引き出しているのだろつ。

「終わつタぞ」

それから二分程で爺さんはそこから出てきた。

「意外と早いな」

「奴らは大しタ事をしテおらん様だからノ。評価できるところがあるとすれば、精々ドラグーン位じゃろつ」

「ドラグーン？　なんでしたっけ、それ？」

「恐竜じゃよ」

「ああ」

「知能が低イノは致命的じゃノウ。おまけに小型種以外は集団行動もとれン有様じゃ。

まったく、数億年掛けてこんな物しか創れンとは……。情けない限りじゃ。

戦闘能力ノ高さは評価に値するがノ」

「爺さんはそれ以上の物を創れるのか？」

「無論創れる、と言いたイところじゃが……ワシは既に答えを見テしまつとるからノお」

「私の記憶か」

「左様。仕方がないから、それを基に創るとするかノ」

こうして人類創造計画は幕を開けた。

地球偏1 人類創造計画（後書き）

おまけ

「いやー、1万年前の地球ってこんなに空気が澄んでるのか」

「……一応言っておくが、お前さんノいた時代まであと400万年は掛かるぞ」

「えっ!?!」

地球偏2 人類創造計画へ新たなる生命へ

キングクリムゾン！

この能力では、この世の時間は消し飛び……そして全ての人間は、この時間の中で動いた足音を覚えていないッ！ 空の雲は、ちぎれ飛んだ事に気づかず……消えた炎は、消えた瞬間を炎自身さえも認識しない！

「結果」だけだ！ この世には「結果」だけ残る！

あれから100年近い時が過ぎた。

未だ計画は成功せず、毎日培養と観察を繰り返す日々が続いく。

現代の人類を遥かに凌ぐ科学力を持つ降臨者ウラヌスといえど、1から生物を創り上げるのは困難であり、ましてやこれから創ろうとしているのは知的生物。自ら考え行動する、そんな生物だ。

気が遠くなるような時間を掛け、細胞を創り育て少しずつデータを集める。そしてそのデータを基に改良を加え、また創り育てる。この繰り返しである。

意気揚々と計画名を叫んだ私だが、残念ながらほとんど役に立ってはいない。

当然だが、二流大学で学んだ程度の知識しかない私では、彼らの

足元にも及ばない。無論爺さんに聞くなり、航行制御球のデータを見るなりして多少は学んだが、それでも精々少々手伝う位の事しかできなかった。

私に人間だった頃の体があればそれを使えるのだが、残念ながら私が持つて来られたのは記憶と人格だけである。悔しいものだ。

??????????

「だあ——！！——全ッッッ然、進まね——！！——」

「何じゃ騒がしイノお。暴れるなら外で頼むぞ」

「何時までバイタルポット（調整槽の様な物。羊水に近いものが入っており、生物の成長に最もよい空間を作り出している）覗けばいいんだよ！

いい加減ちつとは進展しろよ！ 何で知的の欠片も出てこないんだよ、この細胞どもっ！」

「膨大な時間が掛かる。その位分かつておつタじやろう？」

「そうは言うけどな爺さん、もう地球時間で1000年は経っているんですよ。

人間だったらもうすでに私は老後ですよ、年金暮らしですよ。いやむしろ死んでるかも。

もうドラグーン改良すればいいじゃないか？」

そう私が訴えると、爺さんは小さくため息を吐く。

「あれでは汎用性が低すぎる。サイズノ問題もあるしノお。

以前も言っタがあれノ評価できる所は戦闘能力と狂暴性だけじゃ。

あれ以上ノ知性ノ向上は見る事はできンじやろウ。

大体、お主は制御装置コントロールメタルなンじやから、歳はとらんし年金もでらんぞ。寿命も100や200では済まんぞ。

そう焦るでない。まだ100年じやろ？ 更にそノ100倍は掛か
ると思うからノ。

何事も短気は損気じゃ」

「相変わらず何の不自由なく諺を扱うなあ。

実は爺さん元日本人だったりするんじゃない？」

「それは無い」

「ですよー！。

んじゃ、この溜まりに溜まったストレスを発散するために、ちよつ
と外で暴れてきますよ」

「ほどほどにノ」

??????????

静かなアフリカの大地で、一つの影が駆け抜ける。

「見るがいい！ この時速32?の走りをー！」

走り回る。

「見るがいい！（多分）常人の2・5倍のパワーを！」

50?程の岩を片手で持ち上げる。

「見るがいい！ 体内で発生した熱を変換して撃ち出す赤外線レーザーを！」

2秒ほど照射すると枯葉に火がついた。

「つまらね——っ!!」

ほんとうに。

「なあアイザック、私のボディは並の獣化兵^{ソファノイド}より遥かに劣るんだが、どうしたらいいと思う？」

隣にいる謎の哺乳類に話しかける。

「ウオ？」

首を傾げて「は？」みたいな顔をしている隣のこいつは、近くの森に住む猿っぽい哺乳類だ。

霊長類でいいのだろうか？ 20年ほど前にこの森で弱っているところを見つけた。恐らく肉食性の動物にでもやられたのだろう傷があった。それを助けてから妙に懐かれる様になったのだが……。今では「アイザック」シユ。イダー」と名付け、暇な時はこうして

話しかけている。ちなみにこの名前は、とあるさる御方の名前から取ったものだ。知ってる人は知っている、あの無駄に名前の長いさる御方だ。

大きさは120?程でやや黒みがかった体毛を持つ、二足歩行のチンパンジーみたいな奴だ。性格は臆病。正直名前負けしているな。だが、こいつは何気に頭は良かったりする。

棒を使って木の実を落としたり、石を積み上げて階段の様な物を作り高い所へ登ったりする。こいつ実はウラヌスが直接創った生物なんじゃないかと少し疑っていたりする。

んん?

猿、霊長類、類人猿、人類?

人とは何か。

ヒトとは、動物界後生動物亜界脊索動物門羊膜亜門哺乳綱真獣亜綱正獣下綱霊長目真猿亜目狭鼻猿下目ヒト上科ヒト科ヒト下科ホモ属サピエンス種サピエンス亜種の事だ。

そしてヒト科は哺乳類サル目分類群の一つで、チンパンジー亜科やヒト亜科がこれに含まれる。

つまり何が言いたいかと言えば、1から創るより土台があった方が楽じゃないか!

ヒト科に近い生物(例えば猿)を基にすれば時間は短縮できるはずだ!

「サンキューアイザック! やっぱお前大好きだ!」

「ウオ?」

アイザックを抱きしめ礼を言い、爺さんの元へ走る。

??????????

「爺さん！ 猿だ、猿を使おう！！」

猿を使えば時間の短縮になるはずだ！ 人と猿は近種だ。ならば十分使う価値はある。猿を使って人類を創る、どうだ爺さん！！」

「ンン？ 何を言つとるンじゃ？
人類なンぞとづくに出来とるぞ」

へえ？

「————は？」

えっと、あの……い、今何と？」

「じゃから、とつくノ昔に人類ノ初期型は完成しテおるぞ」
プロトタイプ

「……へ？ じゃ、じゃあ一体、今何を創っていらっしやるんでせうか？」

「これか？ お主ノ記憶にあつた生物をノ、面白そうじゃから創つとるンじゃ」

「
」

私は力なく地に伏した。

o
r
z

地球偏3 人類創造計画ゝ以外な真実ゝ（前書き）

注意

今回は顔文字ありです。苦手な方はご注意下さい。

地球偏3 人類創造計画ゝ以外な真実ゝ

現代から約400ゝ200万年程前、この地球に最初の人類『アウストラロピテクス』が誕生した。それは獣化兵^{ゾアノイド}、すなわち生物兵器素体である人類の初期型^{プロトタイプ}の誕生を意味している。

「前回私の知らない間に人類が出来ていたらしいのだが……。
何故！ 何故教えてくれなかった爺さん！」

爺さんに詰め寄る。
教えてもらえていれば、あれ程ストレスが溜まる事もなかっただろうに！

「テつきり知つテおるモノだと思つテな。
^{プロトタイプ}時折初期素体の一体と接触しテおつたようじゃったからな」

しかし爺さん、それをひらりと受け流す。

「はあ？ 初期素体？^{プロトタイプ} 知りませんよ、そんなもの。初耳ですがな」

「おかしいノお？ ほれ、以前お主が治療しておっタではないか」

「治療？ そんな事、ここ数十年アイザック以外にはやっていませんが？」

……

……

……

……！？ あれっ？ ま、まさかっ！？」

「うむ、恐らくそれで合つとるぞ」

「……ア、アイザアアアック！ お前かああああ！！」

「喧しイノお」

「だ、だってそれって、あいつが最初の人類って事でしょう！？ てことはあいつはアウストラロピテクスって事じゃまいか！」

「後ノ人類側ノ呼称じゃな」

「なんか、なんて言うか、何て言うかこう……」。

ええっと、ええっと、ああダメだ、パニックって言葉が出てこない！」

「落ち着かんか馬鹿者。その程度で取り乱しテどうする。ワシノ最高傑作がその程度でうるタえるでないわイ」

「いやいや。ボディはそうでしょうけど、中身は人間ですから。
ソアノイド獣化兵素体ですから」

「全く……（地球時間で）100年以上生き稼働してておるといふのに、一向に成長せんのお」

「いや〜」（〃・ω・）ゞテレテレ

「いや、褒めとらん褒めとらん」

??????????

所変わってとある森の中。今日も友人アイザックを探しておりま
す。

「おーい！ アイザックいるかー？ いないのかー？」

「ウウオツウオツ、ウウ、ウオ」シュタツ

木の上からスタイリッシュに登場する。相変わらずだ。
もう一人木から降りてくる。珍しく誰かを連れてくるようだ。

「おう久しぶりだな、ご先祖兼友人よ。
ほれ、爺さんが木を弄って妙な実がなったから、その御裾おすそわ分けた。
多分毒は無い」

「ウウウ、キャキ、ウオ？」

「爺さんの言うことだし、多分大丈夫だろ。それにもし毒があつても即死じゃなけりや治してやるよ」

「オウ」

「冗談だつて、ちゃんと毒は調べたよ。本当に入っていないから安心しろ。

それよりその隣の奴は誰だ？ お前が誰かを連れてくるなんて珍しいが」

「ウオウオ、ウキヤキヤ、ウウツウ！」

「へえ、嫁さんかい！ なんだよ、お前も中々隅に置けねえな。

じゃあ、これは結婚祝いだ！ 受け取れ」（結婚の概念はないだろうけど）

「ウウーウ、キキ、ウウオウ！」

「じゃあ、しばらく放っておいた方がよさそうだな。新婚さんは、何かと忙しいだろうからな」

「ウウイイ」

「ああ、それじゃあな」

あいつにすら恋人がいるというのに、私ときたら……

????????

「一体何時になったら、私に春は来るんですかね？」

ぐでぐと脱力しながら些細な疑問を爺さんにぶつける。

「？ 今の季節は夏じゃぞ。春は疾^とうに過ぎたわい。
じゃが北半球ならば今は冬じゃからな、そこでもう少し待てば春になるじゃろつて」

流石の爺さんでも、そこまでは理解してないか。

「いやいや、そう言う意味じゃないんすよ。
所謂恋の季節って奴ですよ。青春って人生の春って意味らしいですし、ひよつとしたらもうすぐ来るんじゃないかな」と思ったしだい
で」

「ますます分からん。

お主では生殖行動は不可能であり、且^かつ無意味じゃ。そもそも恋愛感情と言つてもノ自体、脳が引き起こす幻覚作用に過ぎん。お主ではそれ自体がありえん。

それと青春？ お主が……？」

「そんな悲しい物を見るような眼で見ないでくださいよ。」

前世では浮いた話の一つもありませんでしたから寂しいんですよ。前にも言っただけ女性成分がなさすぎるし、ここ」

「そんなもん無意味じゃ。気にする必要はない」

「でしょうね」(´・ω・｀) ショボーン

「……」

「……」(´・ω・｀) ショボーン

「……」

「……」(´・ω・｀) チラッ

「……」

「……」(´・ω・｀) ショボーン

「……」なら、コントロールメタル制御装置が余ってあるから、それを使って擬似人格でも作ってみたらどうじゃ？」

「よしっ！ やりましょうー！」

「恐らく相当厳しい作業になると思うがノ……」

「いよっしゃ——っ！ やるぞ——！」↑聞こえていない。

地球偏3 人類創造計画ゝ以外な真実ゝ（後書き）

この小説改めて読んでみると、あんまり面白くないよ。
作者才能ないね。

まあ、プロット無しに妄想と勢いだけで書いてるから仕方ないね。

こんなところで言うのは何だけど、こんな小説見てくれてる方々に深い感謝！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2034y/>

私は所謂装備品です

2011年12月18日23時47分発行